

ラッハマンの方法とイタリア文献学
ティンパナーロ『ラッハマンの方法の誕生』を通して

竹下 哲文*

2016年5月29日
関西イタリア学研究会 第22回

目次

1	Lachmannの方法とその批判者たち	2
1.1	Lachmannの方法とは？	2
1.2	Bédierと <i>Lai de l'Ombre</i>	2
1.3	Pasqualiとテキスト伝承の歴史	4
1.4	Barbiによる反批判	6
2	Timpanaroの研究	7
2.1	そもそもTimpanaroって？	8
2.2	『ラッハマンの方法の誕生』	8
2.3	写本の系統関係への着目と「派生写本の削除」	8
2.4	原型本 (archetypus) という概念	9
2.5	「受容された本文」 (textus receptus) に対する疑義	9
2.6	系図 (stemma codicum) の作成と活用	9
3	「方法」のもたらした余波	10
3.1	Lachmann以後の古典文献学	10
3.2	Housmanによる批判	11
3.3	<i>La nuova filologia</i> の背景	12

* 京都大学

1 Lachmann の方法とその批判者たち

1.1 Lachmann の方法とは？

Karl Lachmann (1793 - 1851) ドイツの古典文献学者。ルクレーティウスをはじめとするラテン詩人のほか、新約聖書や『ニーベルンゲンの歌』の校訂にも携わった。

Karl Lachmann がルクレーティウス『事物の本性について』の序文 (*T. Lucretii Cari de rerum natura*, 1850) で示したとされる本文批判上の方法論。近代的な文献学の成立において重要な転換点をなしたとされる。テキスト編集の過程を、現存する諸写本の詳細な校合 (recensio) を通してそれらの系統関係を調べ、元となる原型本 (archetypus) を復元し、そこから得られる読みが満足でない場合に校訂 (emendatio) が必要となる、という段階に分けて実践する方針を示した。

この系統関係の調査に際して着目されるのは写本間に共通して見られる「誤り」である。ひとつの本からまた別の本が書き写されていくという生成過程を考えると、オリジナルから隔たるにつれて、誤りは増えこそすれ減ることはない。たとえば写本 A から写本 B が作られたとすると、B には A に含まれる誤りが全て継承され、しかも筆写の過程で生ずるであろう新たな誤りが加わることになる。このような基本的条件を認めたとうえで写本間の異同を調べていくと、それらの間に派生関係が見出されてくる。そしてそれは「系図」(stemma codicum) と呼ばれる樹形図の形で再現することができる。

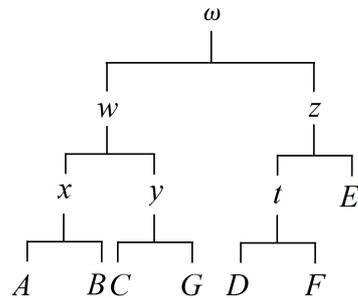
この方法がとりわけ画期的だったのは次の二点である。まず、系図を描くことによって派生関係を明示した結果、親本が現存しているならば、そこからの派生本は理論上無視しても差し支えないということ、すなわち「派生写本の削除」(eliminatio codicum descriptorum) が行えるということ、それから原型本のテキストを個別の読みの内容に立ち入らずに確定できるということであった。

写本の派生関係を調査する必要性は古典文献学のみならず、中世の文献を対象とした研究にも広がりを見せていく。Lachmann 自身も『ニーベルンゲンの歌』の研究を行っており、そうした動きに続く形で中世の文学作品を対象にその写本の校合・調査が行われるようになっていく。しかし一方でこうした方法論に疑義を呈する学者たちも現れてくる。そのなかでとりわけ重要なのが Joseph Bédier であった。

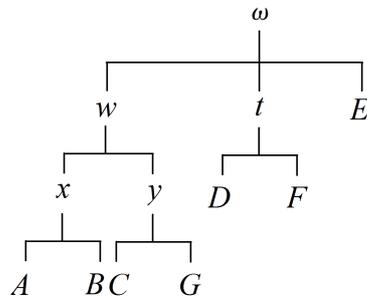
Joseph Bédier (1864 - 1938) フランスの中世文学研究者。説話研究でも知られ、この分野でも師の Paris らが主張した説話の東方起源説を批判した。

1.2 Bédier と *Lai de l'Ombre*

Bédier が取り組んだのは 13 世紀初頭 (おそらく 1217 年から 1219 年の間) に Jean Renart という詩人によって書かれた *Lai de l'Ombre* という 1000 行ほどの作品であった。この小品は 7 つの写本によって今に伝えられており、それらはいずれも原作から 60 年ほど後に作られたものである。短い作品ながら、写本の提供する異読は非常に多く、1700 もの数に及ぶ。これらの写本を調査した結果、Bédier は 1890 年のエディションで以下のような系図 (stemma codicum) を描いてみせた。



しかしその直後、師である Gaston Paris によって Bédier の系図は批判を受ける。Paris が呈示したのは次のような図であった。



Gaston Paris (1839 - 1903) フランスの中世文学研究者。Bédier の師にあたる。1872 年には雑誌 *Romania* を創刊。フランス中世のファブリオーがインドに起源を持つとの説を展開したが、後に Bédier の批判を受けることになる。

重要なのは、原型本から分かれる枝が 2 本か 3 本かという点である。Bédier のモデルの場合、2 本の枝に分かれたグループがそれぞれ違う読みを呈示した場合、原型本の読みを「自動的に」決定することができず、読みの内容に立ち入って選択を行わなくてはならない。他方、Paris のモデルの場合、3 本に分かれた枝のなかに少なくとも 2 つ一致する読みがあればそれが原型本の読みとなり、しかもこの方法で原型本の読みが決定できないのは、3 本の枝それぞれが異なる読みを呈示するという稀なケースに限られるのである。

さて、Paris による批判を受けた後、Bédier はさらに研究を重ねていくなかで、系図法を用いた校訂版に奇妙な偏りがあることに気づく。そして再び、しかし最初とは異なった方法で *Lai de l'Ombre* のエディション作成に取り組むことになる。それが *La tradition manuscrite du «Lai de l'Ombre» : réflexions sur l'art d'éditer les anciens textes* (1928) であった。

上述の Paris は、Bédier の系図を批判して自身のものを描きなおしたのだが、そこから実際に本文を作る作業には移らなかった。このように、系図を作ることだけを、いわば将来の校訂の予備作業として行う学者は他にもいたが、そうした人々の提示するものはことごとく原型から 3 本の枝が分かれる系図であり、他方で自らエディションを作ることまで行った人々の系図は原型から 2 本の枝が分かれる系図に偏っているのである。Bédier の行った統計を信じるならば、110 例中 105 例までが二分枝の系図

を描いていたという。

ここで先に述べた枝の分かれ方による相違を思い出そう。三分枝のケースでは、理論上は原型の読みが機械的に決定できると述べたが、これはあくまで理論上の話に過ぎない。異なる枝に同じ読みが現れたとしても、それが独立に生じた誤記である可能性は依然として存在し続ける。そしてこの可能性は、実際に本文を確定する作業に臨む者には常に不安要因として付きまとう。そこから Bédier は、文献学者たちが「無意識のうちに」(des forces obscures, confinées dans les profondeurs du subconscient) 異読を自分の判断で選択できる二分枝の系図を望んだためにこのような偏りが生じたと推測するのである。そしてかつての自身のテキストを再検討し、次のような結論に達する。

A examiner de nouveau les variantes, je reconnus bien, comme l'avait fait G. Paris, le caractère illusoire, l'extrême fragilité des arguments que j'avais invoqués à l'époque pour me justifier d'avoir dessiné la fourche fatale. Mais il m'apparut aussi ... que mon système d'antan pouvait subsister néanmoins, à titre d'hypothèse indémontrée, mais plausible pourtant et peut-être vraie, et qu'il n'y avait nulle raison de le rejeter en faveur du système de G. Paris, lequel ne représente à son tour qu'une hypothèse plausible, et vraie peut-être, mais pareillement indémontrée ; (pp. 16 - 17)

改めて異読を調査すると私は、Paris が示したとおり、当時自分が決定的な分岐図を描いたと証明するために持ち出した論拠の空疎な性格とこの上もない脆さを認めるにいたった。しかし同時にまた私にはこうも思われたのだ……かつての私の体系は、証明こそされないものの尤もらしくもしかすると正しいかもしれない仮説という名の下に依然として存続する、そしてそちらを斥け Paris の体系——これもまた尤もらしく真でありうるが、やはり証明されない仮説である——の方を優先する理由は存在しない、と。

Bédier はこうした研究に基づき、系図法の限界を指摘した。その代わりに彼が持ち出したのは、現存する写本を調べた上でその中から「最良の」写本を選び、それに修正を加えてエディションを作成するという方法であった。これはそれ以前の文献批判の方法のひとつである *codex optimus* すなわち「最良写本」への依拠という原理を改良したものと言える。そしてこのような単一の写本への依拠という傾向は中世文学のテキスト校訂の手法に大きな影響を及ぼした。

1.3 Pasquali とテキスト伝承の歴史

ところで、今日普通に Lachmann の方法あるいは系図法などと呼ばれている写本の校合手法は、ドイツの古典文献学者 Paul Maas によってまとめられたものを指すことが多い。彼の著作 *Textkritik* (1927) は、誤記に基づく写本の分類手法を理論的に、また簡潔な形で整理したものである。そしてこの作品への書評という形で始まって、最終的には 500 頁近くの大著にまでなったのが、Giorgio Pasquali による *Storia della*

tradizione e critica del testo (1934, 1952²) であった。

Pasquali の書の眼目は、写本伝承の実際は非常に複雑であり、作品ごとに個別の問題や特性を備えているため、過度な理論的抽象化や簡略化は伝承の実体をつかみ損ねる危険性がある、という点にあると言える。たとえば、先に系図法の効能としてあげた「派生写本の削除」についても、実際には削除すべきでない写本が、伝承経路を単純化したために削除されてしまう例がある。また、より新しい写本 (*recentiores*) はより劣った写本 (*deteriores*) であるとして排除される傾向が強かったが、テキスト伝承の歴史が単純化を許さないものであるならば、安易に写本の優劣を判断することはできないのである。

Giorgio Pasquali (1885 - 1952) イタリアの文献学者。その研究対象はテオプラストスやカッリマコス、ホラーティウスなどのギリシア・ラテンの古典とどまらず、イタリア語をはじめとした近代語などにも及び、幅広い領域にわたっている。

... ogniqualvolta nel Medioevo circolavano molti codici di un'opera, è probabile che molti siano andati perduti. E quanto più di una tale opera abbondano codici anche umanistici, tanto più probabile è che una parte di essi riproduca quei codici perduti. (p. 40)

ある作品の写本が中世に多く流通していた場合、多くの写本が失われた可能性がある。そしてそのような作品について人文主義時代の写本が豊かであるほど、それらの一部が失われた写本を写し取ったものである可能性は高くなる。

また彼が「水平伝承」とも呼ぶ、「混成」(*contaminazione*) の発生したケースでは、現存写本が単一の原型へ遡るといふ系図法の理論的前提が崩れてしまうため、その効力は相当程度に失われてしまう。実際には、写本を作るに際して複数の本が参照されるというケースは珍しくなく、とくに中世によく読まれた作品、学校での講読用に定められた作家ほどこの混成が起こっている可能性が高くなるのである。そしてこうした現象が起きているかを見極めるためにもこの読みの内容を評価することは *recensio* の段階でも求められる。Pasquali は Lachmann の提唱した「解釈なき校合」(*recensio sine interpretatione*) に反発を示した。

このため彼は、Lachmann がルクレティウスにおいて一定の成果を挙げたことについて、この作品の伝承の特殊性、すなわち中世にあまり読まれることがなく、また十分に理解されもしなかったため、筆写が機械的に行われ、ほかの写本の読みが混ざりこむこともなかったという事情が多分に作用していると考え (p. 112)。

このように、Pasquali は過度に一般化・抽象化された原則にのみ基づいて機械的にテキスト編集を行うべきではなく、作品や作家ごとの特殊事情を考慮すべきであると考える。『テキスト伝承の歴史と本文批判』というその書名が示すとおり、Pasquali にとっての理想的な校訂者像は次の言葉によく現れているだろう。

Il miglior critico di un testo greco di tradizione bizantina sarà quello che, oltre a essere un perfetto grecista, sia anche perfetto bizantinista. Il miglior editore di un autore latino trasmesso in codici medievali o postmedievali sarà colui che, quanto il suo autore e la sua lingua e i suoi tempi e la lingua dei suoi tempi, altrettanto bene conosca il Medioevo o l'umanesimo. Un critico siffatto è un ideale che nessuno può incarnare in sé perfettamente, ma al quale ognuno ha il dovere di cercare di

avvicinarsi. (p. 123)

1.4 Barbi による反批判

このようにして Lachmann の方法の限界や問題点が議論されるなか、とりわけイタリア文献学のなかでその有用性について再考したのが、ダンテの『新生』の校訂で知られる文献学者 Michele Barbi の *La nuova filologia e l'edizione dei nostri scrittori da Dante al Manzoni* (1938) であった。彼は、伝承の複雑さ・多様性をよく考慮すべきであるという点で Pasquali と認識を共有している。そして古代と中世とでのテキストの性質の差異をも踏まえた上で、それでも経験上一定の効用が認められる系図法を完全に放棄するのは賢明ではないと主張する。系図法を、画期的な万能の方法としてではなく、数ある方法のうちのひとつとして再評価するのである。

Michele Barbi (1867 - 1941) イタリアの文献学者。Dante: vita, opere e fortuna (1933) などダンテ研究者として知られるほか、マンゾーニ全集 (1942 - 1950) の校訂にも携わった。

I casi che si presentano a un ricostruttore di testi medievali sono in realtà infiniti: ... Ma non tutte le opere si sono trasmesse, o si potevano trasmettere, in simil modo, e anche nel medioevo molti sono i testi che si riproducono in modo identico o poco diverso da quelli dell'antichità, e quindi né per lo studio né per l'edizione di essi giova abbandonare i metodi che si sono sperimentati utili e più sicuri per quelle più antiche opere, debitamente integrati e adattati ai singoli bisogni. (p. xx)

実際、Barbi は『神曲』については、先達たちが写本の一部をいわば恣意的に選り出して分類を行おうとしたのに対し、全体的な調査によって eliminatio を行うべきと考え、他方で『新生』の校訂に当たっては、文脈や言葉づかいなど内的な基準を適用することも躊躇わなかった。彼がとった方針とは、彼自身の言葉によると、

... l'edizione dovesse essere ricostruzione critica sul fondamento di tutte le tradizioni, e non riproduzione d'un testo scelto come il migliore e corretto solo degli errori evidenti; e ciò non soltanto per le lezioni di senso, ma anche per il colorito linguistico e gli usi sintattici. (p. ix)

エディションとは、最良のものとして選り出して明白な間違いのみを修正したテキストの複製ではなくて、伝承全体に基づく批判的な再建であるべきである。そしてそれは、意味の解説だけでなく、言語上の色合いや統語的な習慣などにも基づかねばならない……

というものであったが、それに対する反発も少なくはなかった (pp. ix - x)。結局のところ、Barbi が強調しているのは、問題の複雑さと多様性と、それに取り組むにあたっての「単純化」に対する反対の態度であった。彼は方法よりも方法を適用する人間の方に厳しい眼を向ける。

... ed io credo proprio che, piuttosto che del metodo in sé, sia da diffidare di chi l'ha applicato, vedendo quanti si son messi e si mettono intorno a queste faccende senza esperienze né semplici né complesse e senza aver da natura quelle felici

disposizioni che a lavoro così delicato occorrono. (p. xxii)

私自身としては方法そのものよりもそれを適用した人間の方に疑いの目をむけるべきと思う。いかに多くの者が、単純であると複雑であるとを問わずいかなる経験も持たずに、またこのとても繊細な仕事及要求する幸運な性格を生まれ持たずにこの作業に取り組み且つ取り組んできたかを目にすればこそである。

E non dobbiamo aver paura del soggettivo, che non è di necessità l'arbitrario: al contrario quanto più si desiderano procedimenti obiettivi, tanto più va portata in prima linea la ragione come principale fattore in ogni operazione che giovi a un'edizione veramente critica: ... (p. xxiii)

主観的であること——これは必ずしも恣意的であることを意味しない——を恐れるべきではない。反対に、客観的な手続きを求めるだけ一層、理性というのが、本当の意味での批評版に貢献するあらゆるはたらきのうちの中心的要素として第一線に出されなくてはならない。

Barbi の力点が、客観性の追及という名目で「判断」という批評版 (edizione critica) に本来不可欠であるはずの要素が排除されていることへの批判にあることは明白である。Lachmann の方法に一定の留保を加えながら再評価することで、むしろ校訂という仕事のなかでの思考や判断の重要性を再考したと言えるであろう。

まとめ

- 無用な写本を削除し、読みを機械的に決する Lachmann の方法は「客観的」「科学的」な文献学の出発点になった。
- Bédier は、系図作成に入り込む恣意性を指摘し、原型本の復元という道ではなく、単一の写本に依拠しつつ明白な誤りを訂正する「最良写本」の原則へ立ち返った。
- Pasquali は、写本伝承の複雑さ・多様性を強調し、過度の理論化・抽象化へ警告を発すると共に、系図法が無力化されるケースとして「混成」の問題を取り上げた。
- こうした批判に対して Barbi は、一定の留保を加え、数ある方法のひとつとして系図法の再評価を行った。

2 Timpanaro の研究

さて、こうしたことから、Lachmann の方法への批判・反批判を繰り返して今日的な文献学の方法がまとまっていった流れが見えてくる。しかし、当の方法それ自体がどのような起源をもつのか、それは「本当に」Lachmann のものなのか、という問題はあまり注目されてこなかった。この点を、多数の文献を渉猟して明らかにしたのが、Sebastiano Timpanaro というイタリアの古典文献学者であった。この稀有な人物

の書物を通してみると、上にその概略を描いた近代文献学の歴史は、異なった見え方をしてくるであろう。

2.1 そもそも Timpanaro って？

Eduard Fraenkel (1888 - 1970) ドイツの古典文献学者。ユダヤ人であったため後年はドイツでの教授職を追われ、イギリスやイタリアで教鞭をとった。ホラーティウス、アイスキュロスの研究で特に名高い。

Sebastiano Timpanaro (1923 - 2000). パルマに生まれ、フィレンツェ大学で G. Pasquali に学ぶ。またドイツを逃れていた E. Fraenkel から教養を受けている。最初の著作は、ジャコモ・レオパルディの文献学上の業績に光を当てた *La filologia di Giacomo Leopardi* (1955, 1978²) で、その次に公刊されたのがこの *La genesi del metodo del Lachmann* (1985, 1963¹) (『ラッハマンの方法の誕生』) であった。その後も 19 世紀の思想 (*Classicismo e illuminismo nell'Ottocento italiano* (1965, 1969²); *Aspetti e figure della cultura ottocentesca* (1980); *Nuovi studi sul nostro Ottocento* (1995)) や、唯物論 (*Sul materialismo* (1970, 1975²)), 精神分析 (*Il lapsus freudiano. Psicanalisi e critica testuale* (1975)) など様々な領域にわたる研究を行い、晩年には古代におけるウェルギリウスの伝承研究へも大きな貢献を果たした (*Virgilianisti antichi e tradizione indiretta* (2001))。このような業績を残しながら、大学に教授の職を得ることなく、*La nuova Italia* というフィレンツェの小さな出版社で校正の仕事に携わっていたなどの点でも个性的であり、異色の文献学者と言ってよからう。

2.2 『ラッハマンの方法の誕生』

Timpanaro の代表的な著作のひとつ。 *La filologia di Giacomo Leopardi* を第一作とすると、第二作に当たる作品で、上述の Lachmann の方法の起源を問いなおす、文献学上・学問史上重要な業績。ドイツ語訳 (1971)、英訳 (2005) 有。

この著作が問いかけているのは Lachmann の方法と呼ばれているものが本当に Lachmann の方法なのかという問題、すなわち帰属の問題である。系図法を成り立たせている諸々の概念や発想の起源をたどることでこの問題を検証していく。

2.3 写本の系統関係への着目と「派生写本の削除」

はじめに系図法の効能のひとつとして挙げた「派生写本の削除」については、実はルネサンス期にまでさかのぼることができる。キケローの書簡集にかんして配列の乱れが多く、写本に見出されることから、それが綴じ誤った同一の写本から派生したものであることを推定したのは他ならぬ Poliziano であった。その後も、「派生写本の削除」という発想は、この Poliziano の例とは独立な形で Lachmann 以前にも「再発見」されている。

de hoc itaque uno (= Laur. 47, 7), quantum coniciam, cuncti plane quotquot extant adhuc Epistolarum earundem codices, ceu de fonte capiteque manarunt, inque omnibus praeposterus et perversus lectionis ordo, qui mihi nunc loco restituendus quasique instaurandus. (*Miscellanea* cent. I, cap. 25)

Poliziano, 本名 Angelo Ambrosini (1454 - 1494) イタリアの詩人・人文主義者。彼の古典学上の業績は『雑録』(*Miscellanea*) としてまとめられているが、その全容には未だ明らかでない部分も多い。

私の推測では、同『書簡集』の現存する限りの全ての写本が、さながら泉や水源のごとくこの一冊から広がりわたって、全ての写本でその節の順番が前後反転してしまった。これを然るべき場所に戻し、いわば復元しなくてはならない。

2.4 原型本 (archetypus) という概念

現存する写本の派生もとしての archetypus という言葉ははやくもエラスムスの『格言集』(Adagia)に見出すことができる。

Postremo de codicum inter se consensu nequaquam mirandum videbitur iis, qui sunt vel mediocriter in pensitandis conferendisque codicibus exercitati. Fit enim saepenumero, ut unius archetypi mendum, modo veri fucum aliquem prae se ferat, in universam deinde veluti posteritatem librorum propagetur: καὶ παῖδας παίδων καὶ τοὶ μετόπισθεν γένωνται.

写本の比較考量に然るべく熟練した者は複数の写本間に一致があることに驚嘆したりはしないだろう。というのもただひとつの祖本 (archetypus) の誤りが、もし何か真実を覆い隠すものとなった場合には、その後のいわば子孫に当たる書物に遍く広がってしまうということがしばしば起こるからである。そして孫の代へまでも及び、その後もそうなるのだ。

ここでエラスムスは写本間の関係を記述するのにはじめて archetypus という言葉を用いたのだが、もちろんその意味は必ずしも厳密なものとは言えない。ひとつの術語としてこの言葉を用いたのは、Lachmann に先立つ Madvig であった。

Johan Nicolai Madvig (1804 - 1886) デンマークの古典学者。キケローの研究で知られる。その文献学上の仕事は *Adversaria critica ad Graecos et Latinos* (1871 - 1884) にまとめられている。ちなみに読み方はマズヴィ。

2.5 「受容された本文」(textus receptus) に対する疑義

「受容された本文」あるいは「公認テキスト」(textus receptus) という考えが持っている問題を意識することに関しては古典文献学よりもむしろ新約聖書文献学の方が先んじていた。textus receptus への批判はすでに Bentley によって示唆されていたし、Wettstein などの新約聖書学者たちがそれをさらに展開していた。そして当の Lachmann 自身の理念——recensio と emendatio の区別、「解釈なき校合」(recensio sine interpretatione) ——にしても、むしろその新約聖書校訂 (ed. min., 1831; ed. mai. 1842) においてこそよくあらわれている。これは古典文献学にのみ視野を絞っている限りでは気付かれなかったことであった。実際にそうした理念に基づいて新約聖書を校訂した Lachmann の貢献は大きなものだが、すでに 18 世紀から存在していたこの分野の先達の存在は無視すべきものではないだろう。

Richard Bentley (1662 - 1742) 英国の古典学者。マララス『年代記』の調査やホラーティウス、マーネーリウスの校訂・註釈で知られる。

2.6 系図 (stemma codicum) の作成と活用

「写本やエディションの親族関係を構成すること」(familiae et quasi propagationes quaedam et codicum et editionum constituentur) という目標は、Johann Casper Orelli

がキケローの校訂において呈示していた (*Ciceronis Opera quae supersunt omnia I*, 1826). そして, 有効な仕方では写本の系図を実際に描いた最初の例は, 古典文献学に関しては Zumpt の『ウェッレース弾劾』校訂であった (1831). しかもその後, Lachmann に先立って Ritschl や Madvig によりこの技法は洗練されている. とりわけ Madvig は, *De emendandis Ciceronis orationibus pro P. Sestio et in P. Vatinius* (1833) において, テクニカルタームとしての *codex archetypus* という語を用い, その読みを復元するために系図を活用したという点で重要である.

*

以上に短くまとめたように, いわゆる Lachmann の方法を成り立たせている諸要素は, 起源をたどりなおすとそのほとんどが Lachmann 以前ないしその同時代の学者たちの業績であったことは明らかである. ルクレティウスという比較的恵まれた伝承を持つ作品について, その原型の行数や書体などの物理的特徴を推定したこと, そしてその原型の読みを, 「判断」(*iudicium*) を排して復元するための基準を表明したことは Lachmann の真正な貢献と呼ぶことができるだろう. 先達たちの仕事の上にはじめて成立することとはいえ, これらは決して軽んずるべき業績ではない. だが, これだけをもって Lachmann の方法という名前を冠することは不公正な印象を与えるものと言えるだろう.

3 「方法」のもたらした余波

3.1 Lachmann 以後の古典文献学

Johann Gottfried Jacob Hermann (1772-1848) ドイツの古典文献学者. Wolf などとは異なり, 古代の言語と文学にその関心を集中させた. ギリシア悲劇詩人の校訂などで知られる.

August Immanuel Bekker (1785-1871) ドイツの古典文献学者. Wolf の弟子であったが, 必ずしも師の「古代学」の理念に同調的ではなかった. アリストテレス全集の校訂で著名.

Friedrich August Wolf (1759-1824) ドイツの古典文献学者. 言語, 美術, 思想などあらゆる分野から古典古代の全体的理解を目指す「古代学」(*Altertumswissenschaft*) を提唱した.

では, こうした現実にもかかわらず「Lachmann の方法」という呼称が用いられてきたのだろうか? その背景には当時のドイツの文献学界の事情がある. 伝承研究や写本の調査といった点では, Hermann や Bekker といった当時のドイツの学者たちは, たとえば古註をとおしてホメーロスのテキストの歴史に迫った Wolf などの先達よりも後退していた. そのため, 原型本の物理的特徴を描き出して見せた Lachmann のルクレティウス研究が当時の学者たちの目にひととき鮮烈にうつったということはありうる. しかしそれに加えて, 彼の弟子である M. Haupt (1808-1874) に顕著であるが Lachmann をいわば神格化したり, 他の学者と差別化する形で彼の名前をことさらに「方法」と結びつけたりする傾向があった. こうしたことを背景に, 「Lachmann の方法」という定型句が出来上がっていったと考えられる.

さて, Lachmann 以後の古典文献学は, この「方法」を巡っておおきな二極化を経験する. というのも, 伝承本文に対する態度として, それを疑い修正しようとする「革新的」な方向性と, それを可能な限り維持しようとする「保守的」な方向性とが文献学の中にはながらく存在していたのだが, 新たな方法 (の名を冠したものを) を得たことにより, このふたつの路線がいわば先鋭化する結果となったのである.

Lachmann ..., Ribbeck and others had seen in *via ac ratio* the justification for daring and sometimes wholesale feats of radical criticism, especially in the field

of athetization. Their successors, or the less intelligent of them, conversely found in method a warrant for what they called caution and circumspection ... (Kenney, *The Classical Text*, p. 125)

Lachmann や……Ribbeck やその他の人々は「方法」(*via ac ratio*)に、革新的な本文批判の、大胆でときに見境のない離れ技の正当化を見出した。とりわけそれは削除 (athetization) において顕著である。反対に彼らの後継者、あるいはそのうち比較的頭のきれいな者たちは、方法の中に、彼らが注意深さとか慎重さと呼ぶものの拠り所を見出した……

3.2 Housman による批判

とりわけこの後者の方向性を辛辣に批判したのが英国の古典文献学者 Alfred Edward Housman であった。写本の比較校合や重み付けについて一定の進歩が実際にあったことは認めつつも、彼は、それを騙って単一の写本にのみ権威を持たせようとする人々を非難している。

Those who live and move and have their being in the world of words and not of things, and employ language less as a vehicle than as a substitute for thought, are readily duped by the assertion that this stolid adherence to a favourite ms, instead of being, as it is, a private and personal necessity imposed on certain editors by their congenital defects, is a principle; and that its name is 'scientific criticism' or 'critical method'. (*M. Manilii Astronomicon liber I*, p. xxxii)

物質ではなく言葉の世界に暮らし活動し存在していて、言語というものを思考の媒介というよりその代替として用いる人々は、このように勝手に選んだひとつの写本に無神経にも固執する行為が、ある種の編者たちにとって生まれつきの欠陥のために課された私的で個人的な必要なのではなく——実際にはそうなのだが——ひとつの原理であり、そしてその名は「科学的批判」あるいは「批判的方法」である、という主張にたやすく騙されてしまう。

彼によれば、19世紀前半の学者たちの大胆でときに不用意な修正への嫌悪感が、19世紀後半の保守傾向につながり、そうした人々は自分たちのやり方を「客観的・科学的方法」の名を持ち出すことで正当化した。そしてそのような態度に対しては嫌悪を表明し、それを思考の放棄として断罪している。

こうした場面での Housman の言辞はいささか公平さを欠いているかもしれない。伝承本文を尊重し、それを説明するために様々な知識を駆使することは、文献学に欠かすことのできない活動のひとつである。しかし残念ながら、こうした活動からすら逃れようとする傾向が当時の学者たちの一部に見出されたのは事実であり、同様の保守化はイタリアの古典文献学者たちにも認められた。ドイツの学者が行った修正を排斥しようとした人々について、先の Timpanaro は別の論文の中で次のように述べている。

Alfred Edward Housman (1859 - 1936) 英国の古典文献学者。とりわけラテン文学においてその業績は大きく、ユウェナリス、ルーカヌス、マーニウスといった詩人の校訂に携わった。『シュロップシャーの若者』などで叙情詩人としても知られる。

essi infatti rifuggivano, non meno che dalle congetture, dalle ricerche minute di sintassi, di lessico, di prosodia e metrica, cioè da tutte quelle conoscenze di « filologia formale » che permettono di confutare le cattive congetture e di ristabilire le lezioni manoscritte. (Timpanaro, 'Delle congetture', p. 674)

実際のところ彼らは推定修正から逃げるのに劣らず、統語論や語彙、詩形や韻律についての細かな研究——つまり、よくない推定修正を斥け写本の読みを支持することを可能にする「正式な文献学」のあらゆる知識——から逃げたのだった。

このような行き過ぎに対して、Housman が強調したのもまた文献学における「思考」(thought) の重要性であった。

To be a textual critic requires aptitude for thinking and willingness to think; and though it also requires other things, those things are supplements and cannot be substitutes. Knowledge is good, method is good, but one thing beyond all others is necessary; and that is to have a head, not a pumpkin, on your shoulders, and brains, not pudding, in your head. ('Application of Thought to Textual Criticism', p. 84)

文献批判に携わるために求められるのは思考への適性と意欲である。もちろん他にも求められるものはあるが、それらは補助品であって代用品とはなりえない。知識は有益であるし、方法も有益である。しかし他のすべてに勝って不可欠なものがひとつある。それは肩の上にカボチャではなく頭を、頭の中にプディングではなく脳をもつことである。

このようにして見てみると、Housman が展開した無思考への批判には、方法そのものではなくその適用者に警戒の目を向け、判断と思考を重視した Barbi の主張と響きあうものがあるように思われる。ここまでに、Lachmann 以後の古典文献学がたどった道の一端を見たので、ふたたび Barbi の *La nuova filologia* へ立ち戻り、今度はそれが書かれた背景に眼を向けてみよう。

3.3 *La nuova filologia* の背景

Barbi 自身が語っているところによれば、1860 年以後、歴史的・文献学的研究が一種の術学や機械的な営みと混同されたために批判に晒され、「批評」(critica) という言葉が「詩作品の美的価値判断」(la valutazione estetica delle opere poetiche) にのみ用いられるようになってしまった。ここで Barbi が念頭においているのは Croce であろう。Croce は、芸術的創造行為を詩人の実生活と区別せずに研究する実証主義的な「歴史学派」を批判し、その一方でまた機械的な文献学にも厳しい態度をとったのであった。Barbi は、行過ぎた歴史主義、文献学主義への反動 (la reazione contro il filologismo e lo storicismo esagerato e di cattiva lega) は正当なものであるとしても、そうした運動の必然として、斥けるべきでないものまで斥けようとしてしまったと指

摘し、次のように問うている。

Ma da che era mossa quella piega storico-filologica che avevano preso gli studi se non dal desiderio di una conoscenza precisa e intera del mondo reale e spirituale in cui le opere d'arte erano nate, per intenderle e sentirle nella loro intima natura, nella loro varia ricchezza, nei più minuti particolari, e giudicarle così, non con criteri astratti o per l'impressione che producono creazioni d'altri tempi sulla psicologia di noi uomini moderni, ma nella concretezza della loro vita interiore rivissuta da noi per forza di studio ordinato ed esauriente? (p. xxiv)

だがそうした研究を占めていた歴史的・文献学的な方向性はどこから出てきたものだっただろうか？ 芸術作品が生まれた現実世界・精神世界を正確にまた完全に知ろうという欲求——作品をその深い本性において、様々な豊かさにおいて、最も詳細な部分において理解し感じ取るため、また、抽象的な基準や我々近代人の心理に基づいた別時代の創造物が生み出す印象によってではなく、組織だった徹底的な研究をとおして我々により生き直されたその内面的な生の実体において評価するための欲求であった——からでないとするれば。

そして 1930 年頃には、そうした反動から生じた *critica* は行き詰まりを見せ、危機的状况の中にあつた（そこにはもちろんファシズムの影響もあったことであろう）。そのなかで、それまで予備学のように格下げされていた文献学（*filologia*）に再興の兆しが見えてくる。その当時について Carlo Dionisotti は、

eravamo tutti, o quasi tutti, già prima della guerra abbondantemente stanchi, nonché sazi, di tali discussioni. La crisi era aperta ... Non era chiaro affatto come si potesse in Italia uscire dalla crisi. Ma era chiaro che non ne saremmo usciti per virtù di ciarle accademiche. Nel campo delle lettere la filologia per la sua aderenza e subordinazione ai fatti, per la preziosità stessa del suo linguaggio scarno e preciso, tornava di moda. ('Testimonianze a Don Giuseppe De Luca', *Lettere italiane*, XIV 1962, pp. 224f.)

と記し、Pasquali の *Storia* や De Benedetti によるアリオスト (*I frammenti autografi dell' 'Orlando furioso'*, 1937) とならべて Barbi の *La nuova filologia* を挙げている。耽美的なダンテ研究から転向し、ペトラルカの『親近書簡集』校訂に向かった V. Rossi もこの流れに位置づけられよう。Barbi の *La nuova filologia* が書かれたのはこのような気運のなかでのことであつた。Barbi 自身による証言も見ておこう。

Già la nostra generazione reagiva ai suoi maestri che volevano l'edizione critica senza la critica, l'*emendatio* senza l'*interpretatio*, e mirava a uno storicismo totalitario e distingueva benissimo che la vera vita del poeta non era quella esteriore. Se la filosofia è coscienza dei problemi e dei mezzi migliori per risolverli, ... quei filologi eran filosofi anche se non usavano il frasario venuto oggi di moda. (p. xxv)

すでに我々の世代は、批評（*critica*）なき批評版、解釈なき校訂を望んだ師ら

に反対していた。そして全体的な歴史主義を目指し、詩人の真の生を外面的なそれと異なることをしっかり認めていた。哲学が問題と、それを解くための最善の方法を認識することならば……それらの文献学者たちは、たとえ今日流行の言葉づかいをしていなくとも、哲学者であったのだ。

ここで *storicismo totalitario* が何を指しているのか少し捉えづらいが、おそらくここで意味されているのは歴史学派的な断片化した歴史研究の方向性とは違うものということであると思われる。

La nostra generazione non ha da mutare strada, ma da compiere il suo programma, che è sempre stato quello della critica senza aggettivi, ... (p. xxv)

我々の世代は道を変えるべきなのではなく、その計画——常に形容詞なき「批評 (critica) の計画であったもの——の完遂を目指すべきなのである……

文献学から本来の *critica* が失われてしまっていること、「歴史学派」の方向性や機械的文献学への批判という点で、Barbi は Croce と問題意識を共有している。そのうえで、Croce がいわば「道を変えよう」としたのに対し、Barbi は本来の、形容詞なき *critica* の計画を完遂すべきであると主張しているのである。

まとめ

全体としてみると、19 世紀の文献学の歴史は、けっして Lachmann の方法にはじまる単純な方法論上の進歩や洗練の過程ではなかった。Timpanaro の示したように、そもそも Lachmann の方法と呼ばれるものの要素は、彼の先人や同時代の人々の貢献に帰すべきところが大きかった。にもかかわらず、系図法が、読みの機械的決定という点から客観的な方法として格別に重視され、Lachmann の方法という実体に即さない名前を冠した形で大きな影響を及ぼした。それを誤った仕方で適用した古典文献学も、その恣意性を批判して最良写本への回帰をはかった Bédier 以降の中世文献学も、結果的には、思考や判断から過剰に距離をとると同じ隘路に陥ってしまったようである。その背景には、科学的であることと機械的であることとの混同が認められるだろう。このような傾向に対する批判という点で、異なる領域においてはあがあるが、Housman と Barbi との間には一定の共通項が見出せる。しかしながら、Housman の、保守的な研究に向けられた公平とは言いがたい辛辣さと本文批判 (textual criticism) への集中と比べると、Barbi の、形容詞なき批判 (critica) とそこに垣間見える文献学 (filologia) と哲学 (filosofia) の再接近には独自の意義が存在し、今なおそれは失われることのないものであると言えるだろう。

参考文献

- [1] BARBI, M., *La nuova filologia e l'edizione dei nostri scrittori: da Dante al Manzoni* (Firenze, 1938).
- [2] BÉDIER, J., *La tradition manuscrite du «Lai de l'Ombre»: réflexions sur l'art d'éditer les anciens textes* (Paris, 1928).
- [3] BRANCA, V., DE ROSA, G., & DIONISOTTI, C., 'Testimonianze a Don Giuseppe De Luca', *Lettere italiane* 14 (1962), 217 - 228.
- [4] CONTINI, G., *Breviario di ecdotica* (Milano, 1986).
- [5] HOUSMAN, A. E., *M. Manilii Astronomicon liber I* (Londinii, 1903).
- [6] —, 'The Application of Thought to Textual Criticism', *Proceedings of the Classical Association* 18 (1922), 67 - 84. (= *Classical Papers III* (Cambridge, 1972), 1058 - 1069).
- [7] KENNEY, E. J., *The Classical Text: Aspects of Editing in the Age of the Printed Book* (Berkeley, 1974).
- [8] LACHMANN, K., *T. Lucretii Cari de rerum natura* (Berolini, 1850).
- [9] PASQUALI, G., *Storia della tradizione e critica del testo* (Firenze, 1934).
- [10] PFEIFFER, R., *History of Classical Scholarship from the Beginnings to the End of the Hellenistic Age* (Oxford, 1968).
- [11] —, *History of Classical Scholarship from 1300 to 1850* (Oxford, 1976).
- [12] REYNOLDS, L. D., & WILSON, N. G., *Scribes and Scholars: A Guide to the Transmission of Greek and Latin Literature* (Oxford, 1991³). (西村賀子, 吉武純夫訳, 『古典の継承者たち——ギリシア・ラテン語テキストの伝承にみる文化史——』, 国文社, 1996).
- [13] STOPPELLI, P., *Filologia della letteratura italiana* (Roma, 2008).
- [14] TIMPANARO, S., *La genesi del metodo del Lachmann* (Padova, 1985, 1963¹).
- [15] —, 'Delle congetture', *Contributi di filologia e di storia della lingua latina* (Roma, 1978), 673 - 681.
- [16] WEST, M. L., *Textual Criticism and Editorial Technique* (Stuttgart, 1973).